

平田悦朗先生のご退官にあたり

平田先生がお茶の水を去られることになった。時の流れとはいえ、大学にとって大きな損失であることは、すでに大学を辞めた人間にもひしひしと痛感される。

平田先生にはことばに尽くせないほどお世話になった。わたしは昭和61年4月にお茶の水女子大に入り、平成7年3月まで奉職したが、先生は同じ年に3か月おくれておいでになり、9年の間、陰になり日向になりしてわたしの力不足を補ってくださった。心からお礼を申し上げたい。

こう言うと、なんだか恩人に対する窮屈な謝辞のように聞こえるかもしれないが、実は先生がいてくださったお陰で、お茶の水の9年間はほんとうに楽しかったのである。留学生との数々の集まり、徽音祭での行事、日本語文化専攻の設立のための準備、日本語文化専攻の学生たちとの実習その他の活動、あるいは日本語教育関係の学会への参加など、先生がいてくださったお陰で、心強くもあり、明るい気分であることができた。それを思うとわたしはまことに幸運であったとしみじみ思う。また、国立能楽堂での先生の還暦記念の狂言公演を拜聴させていただいて、朗々たるお声に魅了されたことも昨日のこのように思い出されるし、退官後も今年はじめには、国際交流基金のマレーシア・インドネシア巡回指導にもお供することができた。

大学という、やや特殊な雰囲気の中で、NHKアナウンス室次長を勤められ、数々の時事問題を身をもって報じて来られた先生の社会的な感覚あるいは良識というものを、貴重な、また頼もしいものと感じつつ、お付き合いをさせていただけたことは、得がたい経験であったが、何よりも、先生の素晴らしさは、これまでの地位や経歴にこだわらず、わたしどもと淡々と接してくださったことである。書類の整備、コピーとり等の雑用も、これまで人にさせてこられたであろうに、労をいとわずさっと身軽に動き回ってくださったことは、普通はなかなかできないことであるだけに、感動と感謝に耐えなかった。その気取りのない、あたたかいお人柄が、どれほど大学の、また専攻の雰囲気を守り立ててくださったか、おそらく先生が去られてから、残る者の心を打つにちがいない。

――今後もまた折りあるごとにお会いして、さわやかなお話をうかがいたい
ものと願っております。先生、長いあいだ、ありがとうございました――

平成9年6月

水谷 信子